2021 October　秋　Vol.19

会報 安曇人

安曇誕生の系譜を探る会

CONTENTS

1　楽しまれても困ります ・・・・・・・・丸山祐之
2～4　歴史は類推的論証の経緯である ・・ 本郷敏行
4　学習会の10年を振り返って ・・・・・・千國寛一
5　真羊をめぐる冒険・ ・・・・・・・・・加藏友美
6～7　穂高古墳群の新知見－1・・ 土屋和章 臼井直之
8　コロナ禍での会の運営について・・・・・川﨑克之

発行責任者 安曇誕生の系譜を探る会 会長 丸山祐之
編集委員長 丸林一孝　事務局長 川﨑克之
〒399-7102 安曇野市明科中川手1177－3　☎090-5779－5058

写真：小松宏彰

楽しまれても 困ります

会長　丸 山 祐 之

前号の会報で紹介のあった前田速夫著「海人族の古代史」を読んでみました。こういった題名の著作にまず期待するのは、安曇野の安曇族についてどのような記述があるのかという点で、ページを開いてみると、早速ありました。

「信州の安曇野は、有力な海人族の一つ安曇族が開拓したので、その名がついたことは、よく知られている。」と断定しています。他には、ゆかりの地名の一つとして安曇野を挙げており、「彼らが故地である福岡県の志賀島を出発して、瀬戸内海や日本海を東漸、沿岸部から川を遡上して、内陸奥地の山間部にまで入り込んでゆく道筋が髣髴（ほうふつ）としてくる。長野県南安曇郡穂高町に鎮座する穂高神社の祭神が穂高見命で、いまも御船祭で船壇尻（山車）が巡航するのはむろんその結果である。」と、これも断定しています。また、別の箇所でも同様の記述があります。

著者は安曇族が安曇野に分布していた動かぬ証拠として正倉院御物中、天平宝字8年（764）10月の年号名のある調布に二人の安曇部（真羊と百鳥）の名があることとしていて、上限を「おそらく弥生時代まで遡るであろう」としている。私も、少なくともこの年代に二人の安曇部が存在していたのは史実として間違いないと思うが、これをもって弥生時代まで遡るのには、もっと説明が必要です。この二人の安曇部は、著者の言う古代に移住してきていた安曇族の中から、大和朝廷によって安曇部に任命されたのか、それとも大王・王族に直属していた人が中央から派遣されていたのか、又は別の形で安曇部が設けられたのだろうか。安曇郡設置の背景をもっと解明しなければと思います。

著者は数多くの文献を参照して本書を著わしているが、先述の安曇族に関する著述に限って言えば、説得力に欠けます。そうしますと、他の殆どの部分は、かなりの力作に思えるのですが、素人の私としては、半信半疑というか、素直な気持ちで読めなくなってしまうのです。

あとがきで、「古代における歴史・民俗・伝承を主に扱ったが、今回は文学作品などにも触れていて、本人は結構楽しんで書いた。歴史学者・文献史学者からすると、史実と伝承を混同しているとの非難は必至かもしれないけれど、私は史実も、伝承も、歴史の表面に表われたことだけがすべてであるとは思わない。それらを尊重しつつも、その背後にかくされてあるものごと、空白なままを領域に思いを馳せた。在野の人間ゆえのわがままとお許し願う。」としています

著者は“結構楽しんで書いた”とのことですが、当方としては“結構困る”のであります。

（傍点は丸山）

歴史は類推的論証の経緯である

本郷敏行

世界観の違いはやむを得ないが、虚構の史実は許されない

まえがき

県立歴史館特別館長笹本正治先生はこう言ったそうです。「歴史を知ろうとしたら、書かれていることは真実なのか、その後ろに何があるか、それをきちんと解き明かして、時代の中に位置づけなければいけません。それを通じて次の時代をどう作っていきたいかまで持っていくことが、学問として有効性を持つことでしょう。歴史学は、未来を作る学問です」と。 私達はそこまでハードルを上げて「安曇誕生の系譜を探る会」を立ち上げたわけではありませんが、ある程度の学術的議論に堪え得るレベルのものは目ざしたはずです。

「歴史学と考古学はともに、ただ過去のことを扱うだけの学問ではなく、現代のさまざまな矛盾、国家や民族、戦争、環境破壊などの問題に立ち向かい、人類のあるべき未来の姿を展望するという共通の使命をもっている」（松木武彦・日本考古学）と言われると歴史を学ぶ者として、真剣に取り組まなければならないと気合いが入ります。

私達の会の目的は古代史を研究し、安曇誕生のルーツを探ることとしています。 そのために、これまでの研究成果の文献や、遺跡遺物等を勉強し、会員相互の自由な議論によって歴史認識を深めようということであります。私達はもとより素人集団であり、権威も権力もない市民団体であります。 それ故に自由な発想と自由な議論によって自ら考えることにより、その成果は市民レベルの市民と共有できるものとすることであります。 しかしながら人間の社会は進歩しています。 「心の科学は自然科学と連携して人間の本質を追究する、新しいヒューマンサイエンス（人間自体の科学的探求）の中心をなす方法論として歴史学に新しい潮流をもたらしている」といわれています。 私達はただ史実を追うだけでなく、なぜそうなのか、そうなったのか、人の心の動きがどう作用したのかまで考えなければならないということでしょう。

「人間集団から出来ている人類社会の本質は集団的生存競争である」とある経済評論家は言います。 現今の地球上の人類社会をみると、正にこの通りではないでしょうか。 人間社会の歴史を動かす人の心の動きを考えるとき、このことも念頭におかなければならないと思います。 特に私が思うのは一神教による宗教原理主義がこの世に存在することです。 多様な価値観は認めなければなりませんが、原理主義が国際紛争の一因であることは許しがたいことです。 共産党一党支配などという体制もこの類いではないでしょうか。 この事は民主主義の国アメリカにも潜在するそうです。 それは白人でアングロサクソン系のプロテスタントを基盤とする人々で自分達は旧約聖書の古代イスラエルのように“神に選ばれた特別な使命が与えられている”と信じているといわれています。

こうして見ると歴史は多元的に捉えることがあたりまえであり、人の心のしくみ、心の動きがどのような潮流となり歴史を動かしたか、私達の勉強会も一地域、一氏族にとらわれることなく多角的、重層的にやっていくことが重要ではないでしょうか。 この稿の願いも会員の皆さんとこの事を一緒に考えることです。

今まで何を学んだか

私達の活動は勉強会、見学会、講演会、交流会、市民活動参加等多岐に亘ります。これらを振り返り反省すべきは反省して次ぎに繋げて行ければと思います。

勉強会は初期活動の中心でありました。 日本古代史の復習といったところでしょうか。 ですが、これは受動的であり、通説、定説といわれるものの再読であり、その資料は一元史観的なもので新しい知見には欠けるものであったような気がします。 私達の学習は原典ではなく、多くの研究者の方々の著作に頼っています。 それぞれの分野の大家といわれる方々のものもあるのですが、やや時間的経過の隔たりがあり、私達の求めるものには不十分であったような気がします。 近年は考古学的技術の進歩により、新しい発見もあり、また気鋭の研究者の論考により新しい史実も発表されています。 私達もこれらの事に目を向けていかなければなりません。

反省することの二つ目は事後の学習が不足していたことではないでしょうか。 勉強会や講演などで多くの事を学んでも個人としてはそれで良いかもしれませんが、会として会員の共通認識を持つことが必要だったのではないでしょうか。 私達のような団体の運営の難しさがここにもあります。 世には○○歴史研究会という名の団体があまたあります。 どちらかと言えば個別的、具体的目的を持った団体で、対象とする時代も新しく、史料も多く残されており、研究活動は比較的やり易いのではと思います。 それに比して私達の会の研究テーマは史料にも恵まれず、どちらかといえば抽象的で、時代的にも長く難しい問題も抱えています。 私達の研究目的とするものは、団体ではなく、むしろ人で追うべきものではないかとさえ考えてしまいます。 しかし団体でもその方法はあるはずです。

何を学ぶべきか

今私達のまわりには、沢山の研究書、史書、読み物等があふれています。 その中で限りある時間の中で何をどのように選択するかは難しい問題です。 学問の自由、言論の自由に守られて多くの学説や私論が出版されています。

しかし学会という塀の中にいる先生方には、前説踏襲型の著述が多いように見受けられます。 しかも大学の史学

科というところで専門教育を受けていない研究者の書は無視されがちと聞いております。 小説の世界では歴史小説という分野がありますが、歴史小説家の中には独自の視点で、鋭い分析をしている方もおります。 私達も視野を拡げて歴史を見て行かなければなりません。
そのためにも団体の果たす役割があるように思います。
つまり大勢の人の各々の視点で多角的な情報が集められるのです。 これらの情報を整理統合して課題を設定し「推論と検証」を繰り返して行くのです。
ここでは一例として私の個人的な課題としたいものを列挙してみます。 私達は「アヅミ」について様々な考察をしているわけですが、アヅミだけを見ても十分ではなく、古代史全体の中で見るべきことはいうまでもないことと思います。 日本古代史には今も意味不明の事実が多く、謎のまま放置されています。 私はこれらの事柄を含めて考えてみました。

私の考える古代史の課題

○ 日本列島の成立について
（フォッサマグナと安曇平を含む松本盆地の成立を考える）
○ 日本列島に最初に渡来した人々は誰か
（いつ、どこから来たか）
○ 縄文人とアイヌ
○ 中国史書の記述は本当か
（三国志－邪馬台国－、後漢書－倭奴国－）
○ 弥生時代に渡来したとされる人々は誰か
（アヅミと称される集団はこの中にいたのかを中心に考える）
（安曇族という呼称は適切ではないのでは）
○ 中国史書の倭とはどこにあったのか
（倭・倭人とは？についても考える）
○ 三国志・魏志の帯方郡とはどこにあったか
（当時の中国北東部、韓半島＝現朝鮮半島の概略を知っておく必要があります）
○ 安曇族という集団は存在したか
（弥生期と関連して考える）
○ 第三次大規模渡来はあったか
（古墳時代の渡来人について）
○ 九州に王権はあったか
（ニニギ降誕の意味を考える）
○ イズモとはどういう集団か
（出雲の国譲りを併せて考える）
○ 日本列島に王権はどのように生まれたか
（ヤマト王権といわれるものの正体を考える）
○ 安曇平の人々
（旧石器～古墳期を概観する）
（過去の学習の中で新しい視点で安曇の古代を学ぼうとしたが、旧町村史の再読の域を出ていない）
○ 律令国家の実体
（建郡の本当の姿を考える）
○ 磐井の乱と白村江の戦いについて
（九州と大和の関係）
○ 神話について
（神話は後代の人の都合で創作したもの、神代の時代は人間社会の文化が発達した後に人間が創作したもの）

この他にもまだまだ沢山の問題点はあります。 これらについては、会員の皆さんのワークショップ形式の討論によって、課題を出していただき、それらを関連事項毎にまとめて課題群をつくります。 あとはこれを個人なりグループなりに割り振り考察を加えていただき、発表、全体討議という手順で会としての成果とします。

私達の活動は地方史の領域に入るのでしょうが、単独ではあり得ないことはいうまでもありません。 日本史の中のアヅミであり、日本がどのように成立したか、その中でアヅミがどのように形成されたかを明確にすることです。 日本の歴史研究は最初に国学者が係わった故か、日本書紀の影響が大き過ぎると思います。

その問題点は多くの研究者によって指摘されていますが、私達はその壁を乗り越えて、何が史実で、何が虚構の上にあるのかを考えなくてはなりません。 定説、通説といわれる歴史は「予定調和史観」といわれるように曖昧で矛盾に満ちた謎があります。 その謎を解くことが、日本の歴史をきちんと理解し私達が学ぶ安曇の歴史にも繋がってくるものと思います。

あとがきにかえて

『八月や、六日、九日、十五日』（読み人しらず）

この稿は８月に入る前に完成させようとしていたのですが、老化現象との闘いの中で遅々として進まず、遂に８月となってしまいました。 ８月は「８月ジャーナリズム」といわれるように、いろいろなニュースや論考が目と耳に入りつい考えさせられてしまいます。

あの有名なドイツの政治家ヴァイツゼッカー氏の「荒れ野の４０年」を思い出すまでもなく、私達としても、歴史を学ぶ者として、何をすべきかを考えなければならないと思います。 この稿のはじめに学者先生のことばを紹介しましたが、これは「－－－とは何か」を考えるためではなく、何をすべきかを考えるためでありました。
人には人それぞれの歴史観があり「とは何か」も人それぞれ違います。

私達の対象とする歴史は人の書いたものであり、その人の歴史観が反映されたものになります。 私達が何をどのように受け入れるかは私達の判断に委ねられています。

私達は故坂本博先生の「安曇族シリーズ」（全四作をまとめてそう呼びます）を知っています。 安曇族という言葉はこれが最後になるかも知れない（これは私個人の見解ですが）。 この書は、これまでのどの書よりも丁寧

に多分野からの論証が行われています。 しかしその評価は、「史と詩の間で遊んでいる」（第４作“ルーツ”のまえがき）というのもあります。

ここに見るように歴史を書く人、読む人それぞれであり、特に史料の乏しい古代については各人各様、様々な推論が行われています。 私は坂本説の全てに諒解するものではありません。 個々の事跡については他者の説を支持するものが少なくありません。 しかしながら論証の方法論については坂本先生の学問的正統性に敬服するほかありません。 先生はとにかく自分で考えろよと言っています。 これは「推論と論証」ということになるのでしょうが私達に許されることは自分のことばで世の人々に伝わる説明をすることではないでしょうか。 私達にとっては歴史について知らないこと、知るべきことが数限りなくあります。 これから多くの研究者により研究成果は発表されるでしょうし、考古学上の発見もあるでしょう。

私達の活動も終わりはありません。 この終わりのない歴史の学習の中で、一つ一つの課題に「推論と論証を加え、私達なりの一つ一つの成果を積み重ねていくことがこれからの一つの方向ではないかと思っています。

蛇足ではありますが、旦って講演会に招いた伊沢元彦さんは歴史の見方として「他文化と比較せよ」、「専門分野の外から見よ」、「自分の中で論証せよ」と言われました。 「推論と論証」は自然科学、哲学の分野でも認められた方法論であり私達はもう一度、自分で考え、自分の言葉で、誰にでも解るように説明することが出来るよう努めるべきことを確認したいものです。

歴史は総合的、科学的学問であることをあらためて認識しました。

学習会の１０年を振り返って　　千国 寛一

私は安曇誕生の系譜を探る会の発足から２年後にお誘いをいただいて入会し早くも１０年余を過ぎました。

安曇氏族はいつ、どこから、なぜやってきたかを探求することに興味を持ち学習会に参加してきました。しかし、勉強すればするほど疑問がわき期待したような結論にいたらず、謎は益々深まるばかりです。

安曇族ゆかりの地であると言われている福岡市東区志賀島へ３回、滋賀県高島市安曇川町へも複数の会員の末席として訪問し、安曇族サミットへ参加できたことはよい想い出となっております。

また、安曇野市で「安曇ゆかりの地との交流会」第１回を平成２２年（2010）７月に、第２回を平成２３年（2011）２月に、同年９月には全国安曇族サミットを志賀島はじめゆかりの地から７０名、会員８３名、一般参加者を含めて６５０名が穂高会館に集まり盛大に開催されました。安曇氏族について、当会の会員は勿論のことゆかりの地の会員の多くの皆様が本当に深く勉強されていることに感心させられました。

会報「安曇人」の創刊は平成２２年（2010）２月です。年に１回～２回発行され、今回vol.１９となりました。当会の活動状況を知る上で貴重な資料となり、また、安曇氏族について、会員の学者とも思える論文が次々と発表されているため大変勉強になります。編集委員皆様のご努力に感謝いたします。

県内の現地見学も時々実施され、明科地域の遺跡と古墳、北信濃古墳と長野県立歴史館、穂高地域の弥生・古墳時代の遺跡、奥信濃の弥生遺跡、仁科神明宮等々の見学に参加しました。

講演会も会員や著名人等多くの講師の話しを聴くことができ、知識を得ることができました。

仁科濫觴記の読み合わせも行いました。難しい漢字が多く苦労しましたが、再度読み直してもよいかと思っております。

平成２４年（2012）に始まった歴史講座は、安曇野の歴史部会、安曇氏族部会、安曇ゆかりの地部会の３班に分かれての勉強会でした。私は安曇野の歴史部会に所属して三郷・穂高・豊科・堀金・明科・大町・白馬・小谷地域の縄文時代から弥生時代の勉強をしました。また、穂高古墳群のマップや安曇平の歴史の年表を作成しました。この年表は現在、穂高神社御船会館に展示されています。

穂高古墳群の草刈り作業もあり、私は上原古墳の作業に参加しました。

令和元年（2019）から始まり現在も毎月開催されている安曇野歴史サロンは大変好評で、今後も続けて欲しい歴史講座です。

これからも安曇氏族の歴史ロマンを追い続けます。

安 曇 野 歴 史 サ ロ ン

会 場：明科公民館 講堂（☎0263－62－4605）
参加費：会員無料（一般500円 資料代として）
申込み：不要　定員：先着70名

10月例会 10月23日（土）午後2時～3時半
平安時代の安曇郡のムラ
講師：廣田和穂氏
（県埋蔵文化財センター主任調査研究員）

11月例会 11月20日（土）午後2時～3時半
語り継がれる「貞享義民」
講師：清水祥二氏
（貞享義民館前館長）

＊新型コロナの感染拡大状況によっては中止とする場合があります。

真羊をめぐる冒険 ～正倉院宝物 布袴～

加藏（かくら）友美

奈良市の東大寺正倉院に奈良時代中期の天平宝字八年（764）に信濃から租庸調のひとつの調布として貢納された麻布で調製された布袴がある。その腰紐部分に、「信濃国印」の印文の角印が四ヵ所押印され、調進者名と調進年月が墨書されている。

信濃国安曇郡前科郷戸主安曇部真羊調布壱端
長四丈二尺　広二尺四寸
主当　国司史生正八位上中臣殖栗連梶取
郡司主帳従七位上安曇部百鳥
天平宝字八年十月

以上の文は大町市史第二巻168頁より引用した。市史が刊行された当時、大町北小学校長であった幅具義先生が執筆されている。私は同小四年生だった。冬から春にかけて、今よりも水位が下がっていた青木湖の家の下で土器を拾ったり、対岸に黒曜石を探しに行ったりした。それから三十数年。足元の歴史を学びたいと思い、市や公民館の学習会に参加するようになり、正倉院の布袴について話を聞く機会があった。ある日紐解いた大町市史の中で、布袴の写真と幅先生が執筆された文に触れ、進学や転勤で途切れたように感じていた当時と現在を先生が繋いで下さったような気がした。

正倉院は東大寺大仏殿から北西に約300メートルの地に東を向いて建っている。正面33メートル、奥行9.4メートル、総高14メートルの、ヒノキ材を用いた高床式（床下の高さ2.7メートル）の巨大建築で、自然石の礎石に据えられた40本の束柱に支えられている。宝庫は北倉・中倉・南倉の三倉から構成され、内部は二層で約9000点の宝物が現代まで伝えられている。

その中で袴は布製・白絁（あしぎぬ）製・各種の色染めや文様染めの絁製など三十余点がある（註１）。毎日新聞社「正倉院寶物８南倉Ⅱ」186頁から189頁を見ると、南倉136に整理された13点の袴の写真が掲載されている。第8号が、安曇部真羊が納めた調布から作られた布袴である。

正倉院宝物の核となるのは、聖武天皇の遺愛品をはじめとした宝物であるが、正倉院はそもそも東大寺の倉庫だったので、寺の品々も多数収められている。また東大寺造営のために設置された役所「造東大寺司」の関連品も含まれている。具体的には鉛丹などの工芸材料、工匠具、作業着などである。安曇部真羊の袴は東大寺の作業者が着用していたのではないかと考える。

13点の袴の写真を見比べると、第8号が一際状態が良く見え、嬉しく誇らしい気持ちになる。第1号、第2号は装飾の華麗さから見て舞楽用か。伎楽面をつけた舞人を想像する。第13号は袴の残欠で損傷が激しいが、このような状態であっても残っている事が奇跡のように感じる。

ここで残欠（塵芥）について少し触れたい。

塵芥（じんかい）は明治28年に設置された御物整理掛によって名付けられた正倉院宝物の残片の名称である。御物整理掛は、宝物を整理する作業の中で、元来の姿を知ることのできる部分片を残欠（ざんけつ）、残欠の崩壊が進んで元の形を推定できなくなった部分片を断爛（だんらん）、塵や芥となった断片を塵芥、粉状化した繊維片を塵粉（じんぷん）として、分類した。今日も地道に続けられている塵芥の整理作業においては、有名な宝物の一部が発見されることがある。塵芥となった宝物の断片には製作技術の痕跡を残したものもあり、塵芥は宝物の、いまだ知られていない情報を内包する貴重なものである（註２）。

令和元年に東京国立博物館で開催された特別展「正倉院の世界」にて、塵芥が展示された。残欠よりもさらに細かい断片や塵粉まで大切に保管されている。永久五年（1117）の『東大寺綱封蔵見在納物目録』に「辛櫃弐合入雑々絹布等切々」と記された箇所がある（註３）。すなわち平安時代末には、既に染織品の破損が進んでいたのであるが、断片化した染織品も廃棄することなく、櫃に集めて伝えられた。物を粗末にしない、有難いと思う心が、今日の正倉院宝物に繋がっているのだろう。

正倉院宝物を見ていると、よくぞ今まで残っていてくれたと感嘆の思いを抱く。安曇部真羊の布袴については地元産なのでなおさらだ。考えてみれば、安曇部真羊が納めた品は袴ではなく調布であった。養老律令のうち賦役令の調皆随近条によれば、調布は両端に国郡里・戸主の姓名・年月日を記し、国印を捺すことが定められている。調布の使い道は布袴だけではない。紐や袋、鉛丹等を包む布に裁断されることもあっただろう。又、調布の端に位置する国印や墨書銘は切り捨てられる可能性も高かったのでないか。高貴な人が着用する衣ではなく、作業着だったからこそ、墨書銘が残ったのかもしれない。幾多の奇跡のような偶然と1300年の時を超えて、安曇部真羊の名前は今ここに残っている。

四丈二尺（約12.5メートル）、幅二尺四寸（約71センチメートル）の調布から、丈約70センチメートルの袴1着を仕立ててもまだまだ余裕がある。残りの調布は何に使われたのか、天平の奈良の都に思いをはせる。

前科はどこなのか、信濃国印はどこで捺されたのか、誰がどの道を通って奈良の都まで届けたのか…。真羊をめぐる冒険はまだまだ続く。

註１　奈良国立博物館　平成七年正倉院展　目録　72頁
註２　東京国立博物館　御即位記念特別展
　　正倉院の世界　―皇室がまもり伝えた美―　230頁
註３　毎日新聞社　正倉院寶物６中倉Ⅲ　254頁

穂高古墳群　137年後の分析視点と新知見 1

安曇野市教育委員会　土屋和章・臼居直之

はじめに

穂高古墳群が紹介されてから100年以上が経過した近年、安曇野市は、既存遺物を収集して、金属製品の分析・保存処理と土器の再整理を行うとともに、過去の発掘調査を報告書として刊行する事業を進めている。また、2009（平成21）年から今年度まで國學院大學文学部考古学研究室による10次にわたる緻密な学術発掘が継続していること、本市を含め県内で類似する古墳・集落の調査と報告があったことなどから新しい所見を得ている。特に古墳の築造技術、規模、開始・終焉時期、さらには地域の政治・社会構造に言及できる資料が蓄積されつつある。そこで、本稿では今までの研究成果を踏まえて、本古墳群分析の視点と近年得られた調査資料のいくつかを紹介する。

穂高古墳群の概要

穂高古墳群は、安曇野市穂高有明、穂高牧、穂高柏原、穂高地籍にあり、地形的には飛騨山脈東側の扇状地上に位置している。かつては、有明古墳群、牧・塚原古墳群、西穂高古墳群等の名称が付されていたが、『長野県史』（文1）『穂高町誌』（文2）編纂等を経て、現在では西山山麓に展開する古墳群を「穂高古墳群」と表記している（註1）。本古墳群は、既出土の副葬品から6世紀後半～7世紀初頭に築造がはじまり8世紀前半まで継続利用されており、横穴式石室の小円墳で構成されている。

B27号墳

古墳群は、山麓から犀川に至る烏川、中房川と複数の沢による扇状地の扇央上部に立地しており、河川の流域ごとにA～Gの8つのまとまり（＝支群）に区分している（文3）。北から中房川右岸・油川流域をA群8基、天満沢川流域をB群29基、富士尾沢流域をC群5基、烏川左岸をE群として17基、烏川右岸をF群として10基、複数古墳の群を形成せずに単独で立地する古墳としてD1号墳（魏石鬼窟）、H1号墳（大塚様、耳塚）、G1号墳（上原）がある。

古墳分布図

補足

4世紀にはじまった畿内政権（大和政権、王権などとも言う）の象徴ともいえる古墳築造が、東日本に段階的に拡大し、6世紀後半には横穴式石室をもつ小円墳（直径10～20m）として爆発的に増加する。この小古墳が古墳時代後期から終末期には狭い地域に密集して構築され「群集墳」となって日本各地に形成される。この「群集墳」については、「被葬者となるいくつかの家族が、家長（家父長）の死を契機として、何世代かにわたって古墳築造もしくは追葬した結果として累積したもの」と理解されている。また、権力の象徴でもある古墳築造について、畿内政権の地方支配の現れとするか、地域の部族（氏族）連合の自律的行為とみるか意見が分かれるところである。

研究史

穂高古墳群が、周知されたのは、1884（明治17）年に編纂された『長野県町村誌』「西穂高村」の項に「陵墓」として「安曇連大濱墓」ほか9基が、そして「有明村」の項に「古跡」として「鬼の窟」が記述されてからである。また、学術誌への紹介は、1890（明治23）年、鷹野秀雄氏によって『東京人類學會雑誌』に「信濃有明村ノ古墳」と題して遺物の出土報告がなされたのが初見となる（文4）。本古墳群が認識されて実に137年が経過して

いる。本古墳群は、明治時代から長野県屈指の古墳群として注目され、大正時代には長野県史蹟名勝天然記念物としての報告がなされた。以後、古墳の石材や副葬品収集のための発掘がなされ、1918（大正7）年の南安曇郡教育會による金堀塚（B5）の発掘調査（文5）、1930（昭和5）年の猿田文紀氏の上原古墳（G1）発掘調査（文6）を経て1968（昭和43）年の『南安曇郡誌』（文7）、1970（昭和45）年穂高町教育委員会による現況調査記録『穂高町の古墳』、1983（昭和58）年の筑波大学による古墳5基の石室と副葬品の実測をはじめとする学術調査がなされた。更に、1988（昭和63）年には奈良県藤ノ木古墳出土の金銅製冠の「鳥形飾り」と本古墳群出土の金銅製鳳凰型飾板2点が類似する（文8）として全国から注目される事例もあった。

穂高古墳群は、明治時代からの遺物収集で複数の金銅製品、玉類等を副葬品とする稀有の群集墳であることが周知され、昭和30年代以後の現地調査で、分布状況や遺存状態が把握されていた。これによって、古墳群の全体像がイメージできたものの、支群個々の特性や相互の関係性、支群内の階層差を表す要素や関係性、更には安曇郡成立にかかわる群集墳成立と終期、近隣地域との関係性等古墳群解明の多くの課題を抱えたまま今日に至っている。

補足

穂高古墳群の研究の中で注目すべき論考として岩崎卓也らの「穂高古墳群A～C群の分析」（文10）と三木弘の「有明古墳群の位置付け」（文11）がある。岩崎らは石室規模と開口方向から３分類し、副葬品と併せて年代観と立地を推測した。計測資料から、「石室長9m前後の大形の①類は、開口が南で、7世紀前半の遺物が副葬される。これに次ぐ大形の②類は南西から南東に開口し、6世紀後半の遺物が副葬される。石室長5m前後の小形の③類は、南西に開口する。」という傾向を導き出して、同一類型の古墳が隣接立地し、一定の狭いエリアに連続構築されたと推定した。三木はE6号墳（狐塚3号墳）出土遺物の詳細な分析を足掛かりに、6世紀末から8世紀前葉までの4回の追葬過程を明らかにし、副葬品の組成、時期区分から古墳群全体の構造分類を試みた。三木は石室規模を5分類したが、支群ごとの傾向が明確でないことから支群内の立地に着目した。金銅製の馬具など威信財を有する6世紀代に築造された古墳は、一定規模を有し、「墳丘・石室規模において優越的な古墳は、墓域の中で高い場所にほぼ占地している」とし、後続古墳は一定の規制がかけられていたと推察した。

ただ、この論考中でも指摘されているが「実態を具体的に捉えることができる古墳が極めて少ない」などの資料制限があったことは否めず、石室規模・構造の実態解明が待たれていた。

「群集墳」の捉え方

安曇野市内では、本古墳群の他に堀金地区、明科地区に同一時期の古墳群が分布し、近隣町村では松川村、池田町に数基ある。10基をこえる規模の群集墳としては松本市の中山古墳群、秋葉原古墳群、安塚古墳群、大町市の小熊山東南麓・東麓古墳群等があり、相互の関係性が気になる。群集墳は各地域研究の中で、成立・展開の経緯、築造した集団（被葬者集団）の出自や主体となる生業、その組織や習俗などの解明を一義的な目的とし、畿内政権と地域との関りについて追究されてきた。本古墳群においてもこれらを課題として分析が行われている。

複数の群集墳と比較することで、本古墳群の特性を見出すことができる。墳丘・石室の規模・構造、副葬品が観点となるが、盗掘や開発により失われた遺構や遺物の復元、墳丘や石室の構築技術、副葬品の製造・産地分析等々が研究対象として加わっている。例として3つの古墳群を比較してみる。（詳細は次号）

古墳群名 / 項目	穂高古墳群	安塚古墳群	小熊山東南麓古墳群
墳丘	円墳　粘土 周溝不明確	円墳土石混合 開口部周溝	積石塚
石室	無袖	無袖　支柱石	無袖
石材	山麓・河川大形角礫・円礫	河川小・中形円礫	山麓　角礫
副葬品	武具・馬具	武具	武具・馬具
装身具	金環・管玉他	金環・勾玉	金環・管玉他
土器類	須恵・土師器	須恵・土師器	須恵・土師器

このように群集墳には地方差や地域差が現れ、異なる点を多く見出すことができる。また、支群（集合体）内の一古墳を微視的にみると立地や石室の規模・石材が微妙に異なったり、副葬品の中に希少価値のあるものが含まれたりし、階層差を示唆する状況も見られる。**【続く】**

註1　ただし、安曇野市穂高地域の古墳に限らず、堀金地域と松川村所在の古墳を含めて一体の古墳群ととらえる場合もある。

文1　川西清光・松尾昌彦　1984　「穂高古墳群」『長野県史』考古資料編全１巻（３）主要遺跡（中信）　pp.219-230

文2　桐原健　1991　「第二章第三節古墳時代」『穂高町誌』第2巻（歴史編上・民俗編）　pp.57-99

文3　穂高町教育委員会編　1970　『穂高町の古墳』

文4　鷹野秀雄　1890「信濃有明村ノ古墳」『東京人類學會雑誌』第5巻第52號　pp.317-319

文5　太田伯一郎　1923　「第二章第三節　遺跡（古墳）」『南安曇郡誌』（旧）　pp.211-231

文6　猿田文紀　1933　「南安曇郡穂高町上原區古墳發掘に就いて」『史蹟名勝天然紀念物調査報告』第14輯　pp.66-81

文7　南安曇郡誌改訂編纂会　1968　『南安曇郡誌』第2巻上

文8　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　1989　『特別展古代の文化交流を探る藤ノ木古墳』図録　p.52

文9　穂高町・穂高町教育委員会編　1989　『穂高町の古墳群とその人々』

文10　岩崎卓也・松尾昌彦・松村公仁　1983　「有明古墳群の再調査」『信濃』35－11　pp.32-60

文11　三木弘　1995「有明古墳群の再検討（1）―狐塚3号墳の位置付けをめぐって―」『信濃』43－12　pp.14-30（2011『古墳社会と地域経営』に再録pp.317-333）

コロナ禍における会の運営について　事務局長　川﨑克之

昨年来猛威を振るい続ける新型コロナウイルスはワクチン接種が進んだ現在も収束の兆しを見せていません。当会も令和元年・2年と連続して総会を書面表決で開催することを余儀なくされ、会の活動も大きな制約をうけています。会のメイン事業の一つである月例開催の「安曇野歴史サロン」も何回か中止せざるを得ませんでした。

こうしたコロナ禍の中で、会の運営を持続性あるものとして推進するために、第14回・15回の総会において、役員及び運営体制についての議決がなされています。

役員については2年連続して留任することになり、幹事は企画運営委員会または会報編集委員会のいずれかに所属して頂くことになりました。会則も変更され、委員については会長がこれを任命し、委員長は委員の互選により決定すると定められました。しかし、今年度は、コロナ禍が暫く続くことが予想されることから、4月23日開催の役員会において、出席幹事を中心に自薦・他薦により各委員が選任されました。

企画運営委員長には平林厚美氏が、担当役員として松尾宏副会長、事務局担当として古川幸男事務局次長が、そして会報編集委員長には丸林一孝氏、担当役員として金井透副会長、事務局担当として保阪庸三事務局次長が、それぞれ選任されました。

企画運営委員会では、歴史サロンや現地見学会、古墳整備等が企画されており、コロナ禍の中での運営方法や実施そのものの可否も含めて検討されています。

会報編集委員会では、会報への信頼性とクオリティを高めるために、掲載する論考について単なる校正作業ではなく、校閲のレベルまで行うことが求められています。

これまでは幹事の役割が不明確なまま、年を経る毎に人数のみが増え、会則では若干名と定められているにも関わらず、令和3年度で17名を数えています。幹事の皆さんが会の推進する様々な活動に積極的に参加して盛り上げて頂いています。しかし、ここしばらくは続くであろうコロナ禍の中では、より機動的・機能的な運営体制を整えることが急務だと思います。

また、ライングループやメーリングリストを使用するなどして、リアルタイムでコミュニケーションが取れるようにし、さらにはズームによる講演会やYouTubeによる発信も検討したいものです。

コロナ禍を契機として、時代に即した形で、より継続的・発展的な歴史を学ぶ会とするために、会の運営及び活動へのご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

コロナ禍の中の歴史サロン　好評開催中

４月例会　4月23日（金）

「戦乱を生き抜いた安曇野の人たち」講師：百瀬新治氏

昨年度の歴史サロンで「安曇野の戦国時代史入門」ということで、市教育委員会の逸見大悟氏より、武田氏の侵攻から滅亡、そして天正壬午の乱に至る時代を3回に亘って講演していただきました。。当会としては時代的には全く新しい試みでしたが、市民の関心は高く、コロナ禍にも関わらず多数の市民にご参加いただきました。

こうした中で、当会顧問で豊科郷土博物館前館長の百瀬新治氏より「戦国時代は武士や領主だけの時代ではない、安曇野で生きた庶民にとっては苦難の時代で、庶民の側からの歴史がある。」と、自ら講師をかってでていただき、厳しい戦国の世を逞しくもしたたかに生き抜いた人々の姿について、堀金に残る痕跡を中心にして語っていただきました。

６月例会　6月26日（土）

「天武天皇とその時代」講師：原　明芳氏

豊科郷土博物館館長の原明芳氏には、「安曇野の考古学入門」ということで、弥生時代から古墳時代、そして奈良時代へと3回ご講演いただき、3月には、総仕上げとして長野県考古学会前会長会田進氏を招き、**「信州の考古学よもやま話」**と題して対談していただきました。原館長は聴衆が関心を抱いていそうな疑問を次々と繰り出し、会田氏がそれに答え、原館長がさらに補足していくという方法は、参加者に大変好評でした。

６月例会は、会場からの質問や突っ込みに答えながら進めるというツーウエイの新しい試みでした。原館長には突拍子もない質問に、講演よりも緊張と集中が強いられたと思います。また、受講者も事前の学習があって初めて成立する講演会だと痛感しました。今後も理解を深めるための様々な方法を考えていきたいものです。

編集後記

丸林一孝

今年の春、会報の編集委員長に任命されましたが、勤務先を退職するまでエンジニアとして働いてきた私には歴史物は全くの素人なので寝耳に水でした。＊それでも任された以上やれるだけやってみようと編集ソフトを購入し（会から半額補助を頂きました）操作方法を覚えている頃に頼んでいた方々から原稿が集まってきました。＊ところが昼間は秋に向けて農作業をこなし、夜は原稿の精読作業、そしてテキスト化が必要な原稿も一部あったので、日々仕事に追われ肝心の編集作業には手が付けられませんでした。＊さらに各編集委員との打ち合わせや校閲等も必要でしたが簡単には対応できず、今回は手慣れている川崎事務局長に大半をお願いしました。

次号は私が制作しますので乞うご期待を。

――――――――

（企画運営委員会より）

８月歴史サロン「木曽義仲と勇将達の夢の跡」（講師：長瀬啓一智氏）は、コロナ拡大防止のため中止としました。